

否定疑問文に対する日本語と独語・英語の考え方の相違

寺門 伸
佐藤 利哉

「...ではありませんか」「...しないのですか」「...はないのですか」といった否定の語句を含む疑問文を否定疑問文というが、否定疑問文という形式に関して、日本語とドイツ語、あるいは英語とでは考え方に明確な違いがあることに気がついた。本論文は日本語とドイツ語・英語が否定疑問文という形式で表現しようとする内容を検討し、その違いを明確にすることを目的とする。

否定疑問文に対する答え方は初級文法に属する知識であるから、ドイツ語を学び始めてすぐに習うことになる。今手元にある常木実著「標準ドイツ語」（郁文堂）の説明を引用してみる：

上例 5. (**Haben Sie keinen Hunger?**「お腹はすいていないのですか」)のように、疑問文に否定詞 (**keinen**) があるとき、これを打ち消して肯定の返事をする場合には **doch** を使う (**Doch, ich habe Hunger.**)。また上の **Haben Sie keinen Hunger?** に対して「ええ、すいていません」というように否定の返事をするときには: **Nein, ich habe keinen Hunger.** という。**Nein** を「いいえ」ではなく、「ええ」「はい」と訳すことに気をつけなくてはならない。日本語式に **Ja** と言ってはいけない。否定詞を含む返事的时候は **nein** を使うのがドイツ語とかぎらず英・仏語、その他ヨーロッパの言語に共通の現象である。(S.41, 練習問題の解答の[備考]部分)

ドイツ語では否定疑問文に対して肯定の答えをする際の **doch** が問題となるが、ここでは話を分かりやすくするため、英語の否定疑問文から始めることにする。英語では否定疑問文に対する答えは、肯定の答えなら **yes**、否定の答えは **no** となる。

Don't you like American movies? 「アメリカ映画はお好きではなのですか？」

Yes, I do. 「いや、好きですよ」

No, I don't. 「ええ、好きではありません」

つまり英語では、疑問文が肯定の形をしていようが、否定の形をしていようが、答えそのものが否定文でなく肯定文であれば **yes** を、否定文であれば **no** を使うということになる。確認のため、肯定疑問文の場合と比較しておく。

Do you like American movies? 「アメリカ映画はお好きですか？」

Yes, I do. 「はい、好きです」

No, I don't. 「いいえ、好きではありません」

英語を学び始めたときから私はこの現象が不思議でしかたがなかった。なぜなら私たち日本人にとってこの否定疑問文は「相手（聞き手）がアメリカ映画は好きではない」という話し手の観念が出発点となって、それが事実かどうかと尋ねているわけであるから、聞き手はその観念を察知して、もし自分が「アメリカ映画は好きではない」のであれば、「はい、あなたの考えのとおり、私はアメリカ映画は好きではない」と答えるのが当然だからである。

この疑問を解決すべく、私はこう考えた――イギリス人やアメリカ人は日本人と比べて自我が確立しており、他人の意向に左右されることなく、

事柄そのものが肯定か否定かだけを問題とする。したがって相手がどのような形で疑問を提出しても、相手の思惑とは関係なく、それを事柄そのものに関する疑問ととらえ（つまり「アメリカ映画は好きか」も「アメリカ映画は好きでないか」も、「アメリカ映画は好きか」という基本形に還元して受け取る、という意味である）、肯定の事柄であれば一貫して **yes** と言い、否定の事柄であればこれも一貫して **no** と言う。

さてドイツ語を学び始めると、最初に言ったように、今度は否定疑問文に対する肯定の答えは **doch** で始めるということを知る。**doch** は後ほど取り上げるが、「相手の期待を反駁する」という働きがあるから、ドイツ人はイギリス人やアメリカ人とは違い、多少は相手の気持ちを押し量ろうとする傾向があるのかな、などと考えてみたりもした。

今ははっきり分かるが、この私の推測は完全に間違っていた。否定疑問文に答える際には、イギリス人・アメリカ人、そしてドイツ人もやはり、相手の意向を十分にくみ取っているのである。

英語で否定疑問文に対する **yes** と **no** の関係が、日本語の「はい」と「いいえ」とは正反対になる理由は、実は簡単なことなのである。それは、英語の否定疑問文は、日本語とは異なり、最初から肯定の答えを予想しているということである。

具体的に説明する。

Don't you like American movies? という疑問文は普通、「アメリカ映画はお好きではなのですか？」と日本語に訳されるが、この英語と日本語の間には意味のずれがある。この英語は「アメリカ映画はお好きでしたよね？」と訳したほうがよい。そのほうがこの疑問文の問いの本質を相手に正確に伝えることができる。

つまりこの否定疑問文は、相手に伝えんとするメッセージからいうと、**You like American movies, don't you?** という付加疑問文とほとんど同じである。したがって、好きである場合には **Yes, I do.** と答え、好きでない場合には **No, I don't.** と言う。

Don't you like American movies? をパラフレーズしてみる。「アメリカ映画が好き」という想定を A とする。

1. 「私はてっきり A だと思っていた」
2. 「しかし not A だと思わせる出来事があった」
3. 「でもそんなことはないだろうと思って質問する」

つまり、Don't you like American movies? に即して言えば――

1. 「私はずっとあなたはアメリカ映画が好きだと思っていた」
2. 「しかし、ひょっとしたらあなたはアメリカ映画が好きではないのかと思わせる出来事があった」
3. 「でもまさかそんなことはないだろうと思って質問する」

ということになる。

これが英語の否定疑問文を発する際の話し手の基本的な心の動きである。これが当てはまらないケースも存在するが、英語の否定疑問文には、ほとんどの場合、このようなニュアンスがつきまわっていると考えていいであろう。

英語の否定疑問文は、事実上は「付加疑問文としての肯定疑問文」である。従って、それに対する答え方は、肯定疑問文の場合とまったく同じになる。

否定疑問文の実例をもう少し挙げて、このことを確かめてみる。

a) Wasn't there much traffic on the road?

「途中の道路は車が渋滞していませんか？」

(= 「だって途中、車が渋滞していたんでしょ？」)

Yes, there was.

「いや、渋滞していましたよ」(日本語の答え)

「はい、渋滞していました」(英語の答え)

No, there wasn't.

「ええ、渋滞していませんでした」(日本語の答え)

「いいえ、渋滞していませんでした」(英語の答え)

b) Aren't you a member of the club?

「あなたは会員ではないのですか？」

(=「だって、あなたは会員なんでしょう?」)

Yes, I am.

「いえ、会員ですよ」(日本語の答え)

「はい、会員です」(英語の答え)

No, I'm not.

「ええ、会員ではありません」(日本語の答え)

「いいえ、会員ではありません」(英語の答え)

このように、私たち日本人が英語の否定疑問文のニュアンスを理解するためには、否定疑問文にぶつかる度に、必ずその後に「...ないなんて、うそでしょう?」とか、「...ないなんて、まさかね!」という言葉添えるようにするといいと思う。

「アメリカ映画はお好きではないのですか？」

(好きでないなんて、まさかね!)

「途中の道路は車が渋滞していませんでしたか？」

(車が渋滞していないなんて、まさかね!)

「あなたは会員ではないのですか？」

(会員じゃないなんて、まさかね!)

否定疑問文はほとんど常に「...ないなんてことはないんでしょう?」と

いうニュアンスがつきまどっているから（つまり、肯定の答えを予想しているから）、そのニュアンスをくんで、英語では肯定の答えは、「ええ、そんなことはないんです」と yes で答え、否定の答えは、「いえいえ、やはり...ないんです」ということなので、no と反応する。そうすると、否定疑問文に込められた意味合いが異なっているだけで、英語でもやはり相手の意向を考えながら答えていることになり、結局日本語と基本的な考え方は同じである。

日本語の否定疑問文は否定の答えを予想して発せられるが、英語の否定疑問文は肯定の答えを予想している。したがって、それに対する答え方が、日本語と英語とではまったく逆になる。

ところで、人があることに関して疑問をもった場合に、その疑問はどのような場合に肯定形で表現され（つまり肯定疑問文の形になる）、どんな時に否定形で表現される（つまり否定疑問文の形になる）のか、という問題を考えてみる。まずは英語から検討してみよう（後ほど述べるが、ドイツ語と英語の否定疑問文に対する考え方は基本的に同じである）。

「お好きですか？」も、「お好きではないのですか？」も、結局は同じ事実関係に関する疑問であるから、いずれの聞き方をしても、求める答えはちゃんと返ってくるはずである。にもかかわらず、肯定疑問文と否定疑問文という 2 種類の疑問文の形がある。この 2 つは実際にはどういう基準で使い分けられているのであろうか。

まず、問いを発する際に、相手から肯定の答えも否定の答えも特に予期していないという時、つまり純粹に事柄そのもの、事実関係そのものが分からないので、相手に尋ねるというニュートラルな疑問文は、肯定疑問文によって表現される。

英語の肯定疑問文と否定疑問文の使い分けの原則その 1 :

無前提で「アメリカ映画が好きか嫌いかな」等を問うニュートラルな疑問文は肯定形になる。

Do you like American movies?

(=I don't know if you like American movies or not.)

Was there much traffic on the road?

(=I don't know if there was much traffic on the road.)

Are you a member of the club?

(=I don't know if you are a member of the club or not.)

これに対して、英語の否定疑問文は通常は無前提で発せられるのではなく、ある特殊なニュアンスをもっている。

英語の肯定疑問文と否定疑問文の使い分けの原則その2 :

ニュートラルな肯定疑問文に対し、否定疑問文は肯定疑問文に次のいずれかのニュアンスを付け加える—1. 肯定の確認(相手に同意を求める) 2. 驚き・意外性 3. 非難・叱責・詰問

実例を挙げる :

1. 肯定の確認 (相手に同意を求める ; いわゆる「反語疑問文」)

Don't you think so? 「そういませんか」

(=You think so, don't you?)

Isn't it beautiful? 「きれいじゃありませんか」

(= It's beautiful, isn't it?)

2. 意外性・驚き (=Is it really true that ...?)

Didn't anyone call last night?

「昨夜だれも電話をかけてこなかったの？」

Isn't the elevator working? 「エレベーター、動いてないの？」

Can't he operate a computer?

「彼って、コンピュータの操作もできないのか？」

3. 非難・叱責・詰問

Can't you keep still a minute?

「1分間も静かにしてられないのか！」

What? Haven't you done your homework yet?

「何だって、まだ宿題をやっていないのかい？」

1. の「肯定の確認」は問題ないであろう。not A? 「A じゃないですか」という疑問文で、聞き手に「間違いなく A ですよね」と同意を求めつつ、その事実を強調・確認しようとする用法である。この場合は肯定の付加疑問文「A なんでしょう？」に変換することが可能である。確認の否定疑問文（「...じゃありませんか」「...じゃないですか」「...くないですか」、さらには若者言葉の「...じゃん?」「...くない?」）という筋道は日本語でも発達しているので、すぐに理解できるはずである（日本語の否定疑問文¹⁾の用法に関しては後ほど扱う）。

「意外性・驚き」と「非難・叱責・詰問」は一応項目としては別になっているが、例文を見れば分かるように、両者の間にはっきりとした境目はない。「コンピュータの操作もできないのか？」は驚きの表現でもあり、同時に非難の意が籠もっている。「まだ宿題をやっていないのかい？」も、「非難・叱責・詰問」ではあるが、同時に「意外性・驚き」の表現でもある。

ところで「意外性・驚き」と「非難・叱責・詰問」は、「確認の否定疑問文」とは異なり、話し手は相手から「肯定の答えを予想している」わけではない。「まだ宿題をやっていないのか」という叱責であれば、話し手は聞き手が「宿題をやっていない」ということを事実と認定しながら、その事実に関して相手を叱責しているのである。

しかしよく考えてみると、「まだ宿題をやっていないのか」という否定疑

問文は、聞き手がもう宿題は当然終わっていないから、という話し手の判断が基礎になっているということが分かる。相手がまだ宿題を終えていないという意外な事実と直面し、その事実は「とても信じられない」という気持ちがあって、それが否定疑問文という形をとらせるのである。

そうすると英語の否定疑問文は「肯定の答えを予想している」(＝「not Aではなく A が事実であることを期待している」というだけでは不十分である。また、否定疑問文の基本的特徴を大雑把に掴んでおくため、「否定疑問文は事実上肯定の付加疑問文である」と言ったが、これにも補足や修正が必要である。

英語の否定疑問文（「まだ宿題を終えていないのか？」）は、肯定の答え（宿題を終えている）が当然であるという判断のもとに、それが事実であることを予想（宿題を終えているはず）したり、あるいは事実でないことの意外性（宿題を終えていないなんて！）や事実でないことに対する不満（宿題を終えてなくっちゃ！）を表現するための疑問文の形式である。

ここで出発点に戻って、今回なぜ否定疑問文を取り上げたかというところ、日本語と英語、あるいはドイツ語で、否定疑問文に対する答え方が異なるということであった。そしてその違いは、否定疑問文を発するときの前提となる、話し手の状況判断に由来しているということをつきとめた。

英語で否定疑問文が用いられる前提に関しては、ここまでである程度明らかとなったが、逆に今度は、日本語において、どのような場合に肯定疑問文を採用し、どのような場合に否定疑問文を採用するのかという、そもそもその判断の前提についてもう一度反省的に確認しておく必要がある。

結論から言うと、肯定疑問文の取り扱い、英語も日本語も同じである。相手から返ってくるであろう返答に関して特別の予断を持たない疑問、つまりニュートラルな疑問は、英語でも日本語でも肯定疑問文によって表現される。問題は否定疑問文で、これが英語と日本語で大きく異なってくる。

日本語の否定疑問文は、英語とは異なり、その形式そのものには、「肯定

の答えを当然のこととして予想する」という前提は含まれていない。最初に否定の命題（「宿題を終えてない」）があつて（＝否定の命題が観念として生じて）、それを疑問形として提示するというのが日本語の否定疑問（宿題を終えていないのか？）である。もし最初に肯定の命題（「宿題を終えている」）があれば、それは肯定疑問（「宿題を終えているか？」）になる。

英語の場合は、生じた疑問は「宿題を終えたかどうか？」という、事実そのものを問う形でとらえられる。これは通常そのまま肯定疑問文によって表現されるが、その際に「宿題は終えているはずだ」という予断をもっている、否定疑問文の形をとるということになる。

つまり、日本語の疑問文は肯定形であれ、否定形であれ、特殊なニュアンスをおびることのないニュートラルな疑問文として用いられるのが原則である。ただし、相手から返ってくるであろう答えに対して、話し手がまったく判断を留保していることはまれで、通常は肯定疑問文の場合には素直に肯定の答えを、否定疑問文の場合は否定の答えを予想している。

日本語の否定疑問文（話し手が否定の答えを予想）に対する答え方→

「はい、（あなたの予想の通り）...ではありません」

「いいえ、（あなたの予想とは異なり）...です」

英語の否定疑問文（話し手が肯定の答えを予想）に対する答え方→

「はい、（あなたの予想の通り）...です」

「いいえ、（あなたの予想とは異なり）...ではありません」

ここまで述べたことをまとめてみる。

1. 日本語の疑問文は、肯定形も否定形もどちらも原則として、話し手の個別判断を交えない「ニュートラルな疑問」を表現するが、通常は話し手は肯定疑問文を用いるときには肯定の答えを、否定疑問文の際には否定の答えを期待している。

2. しかし反語疑問文だけは例外で、それとは全く逆に、否定疑問文であれば肯定の確認、肯定疑問文であれば否定の確認を相手に求めるという趣旨で用いられる²⁾。

このように日本語と英語の否定疑問文は、その基本的な考え方が異なっているのですが、それに対する答え方も正反対になるが、実際に否定疑問文が表現することのできる意味範囲はほぼ重なり合っている。しかし、日本語には英語やドイツ語にはない否定疑問文がある。それは「遠慮がちな質問としての否定疑問文」である。

「遠慮がちな質問としての否定疑問文」はいかにも日本人らしい疑問文の形式で、「話し手の前もっての判断」とは関係なく、その場での相手に対する配慮として、質問がぶしつけにならないよう、多少遠慮がちに否定の形にして質問する、という筋道のことである。これは英語やドイツ語にはない用法なので、英語とドイツ語では否定疑問文の形にはできない。

実例を挙げてみる：

「このあたりに銀行はありませんか？」

Is there a bank around here?

(ドイツ語では *Gibt es hier in der Nähe eine Bank?*)

英語やドイツ語で「このあたりに銀行ありませんか」と聞くのに、日本人はつい日本語にひかれて、**Isn't there a bank around here?** (ドイツ語では *Gibt es hier in der Nähe keine Bank?*) と言いたくなってしまいが、こういう時、英語やドイツ語で否定疑問文を使うことは決してない。

なぜなら、英語やドイツ語の否定疑問文は通常、相手から「肯定の答えを答えを予想」しており、そこから出発して、ある場合には自然に「驚き・意外性」を表現し、またある場合にはこれも自然に「非難・叱責・詰問」のニュアンスを帯びることがあるからである。もし **Isn't there a bank**

around here? / Gibt es hier in der Nähe keine Bank? という言い方をすると、「銀行は当然このあたりになくちゃいけない」とか、「このあたりに銀行がないなんて変ですよ」といった余計なニュアンスが加わって、具合が悪いのである。

(インフォメーションなどで)「町の地図いただけませんか？」

Can I have a city map?

(ドイツ語では **Kann ich einen Stadtplan haben?**)

これも上の銀行の有無を尋ねる場合と同様で、決して **Can't I have a map?** (ドイツ語では **Kann ich keinen Stadtplan haben?**) とは言わない。否定疑問文の形にすると、「私は地図をもらえるはずだ」という押しつけがましいニュアンスが付け加わってしまうからである。

それでは逆に、日本語はこのような場合、普通の肯定疑問文でよさそうなところを、なぜわざわざ否定疑問文の形にするのかというと、人にもものを尋ねたり、頼んだり、誘ったりする場合には、否定形の表現のほうが丁寧である、という日本語の道筋が存在するからである。

「原稿をチェックしてしていただけますか。」

「コーヒーををお飲みになりませんか。」

「切符をお持ちでない方はいらっしゃいませんか。」

「一緒に映画を見に行きませんか。」

このように、一見日本語の「遠慮がちな質問・依頼としての否定疑問文」に相当するものが英語やドイツ語に存在するようでも、英語とドイツ語の否定疑問文には、常に相手から「肯定の答えを当然のこととして予期する」という要素が伴っていると考えられる³⁾。

さて今度はドイツ語を検証してみよう。ドイツ語の否定疑問文の考え方

は基本的に英語と同じであると言った。問題は否定疑問文に肯定で答える際の **doch** である。

doch という副詞には様々な用法があるが、その基本義は「相手の期待に対する反駁を表現する」ということである。このことがはっきりと分かっているならば、否定疑問文に対して肯定の答えをする際に **doch** を用いるドイツ語の心理は容易に理解することができる⁴⁾。

英語の否定疑問文のパラフレーズをここで思い出してみよう。このパラフレーズはドイツ語にも当てはまる。

1. 「私はてっきり A だと思っていた」
2. 「しかし **not A** [**nicht A**] だと思わせる出来事があった」
3. 「でもそんなことはないだろうと思って質問する」

これが否定疑問文を用いる際の話し手の心の動きであるが、ここで話し手の心は「肯定→否定→肯定 (= 否定の否定)」という具合に揺れ動いている。これをもう一度、今度は **Haben Sie kein Geld dabei?** 「お金がないんですか?」というドイツ語の否定疑問文に当てはめてみよう。A が「お金がある」**“Sie haben Geld.”** で、**not A** が「お金がない」**“Sie haben kein Geld.”** である。

最終的な疑問文は **not A**? 「...ではないのですか」という否定の形になっているが、この背景に「**not A** (= お金をもっていない) なんてありえない」、つまり「A (= お金をもっている) にちがいない」という話し手の予期が含まれているから、その点に注目して、英語は「ええ、あなたの予想通り、**not A** なんてことはないのです」(つまり「ええ、あなたの予想通り、A なんです」)、あるいは「いいえ、あなたの予想とは異なり、**not A** なんです」と答えるのであった。

このように、英語とドイツ語の否定疑問文はどちらも、最終的には「...なんてことはないんでしょう」という否定の付加疑問という意味合いで提

示されるのだが、否定疑問文の背景となる心の動きの一番のポイントとなる点は、たとえ一瞬であれ「あるいは not A なのか？」という疑いが話し手の心の中に生じたということである。この疑いに対してこれを反駁するのが、ドイツ語の **doch** である⁵⁾。

Haben Sie kein Geld dabei?

「お金はもってないの？」

Doch, ich habe Geld dabei.

(相手は今「あるいはお金をもっていないのではないか」と疑ったが)

「そんなことはない **doch**、もってるよ」

Nein, ich habe kein Geld dabei.

(相手が最終的に「やはりお金をもっているはず」と予想したことに
対し)

「いいえ **nein**、もっていない」(この答え方は英語と同じ)

最後になったが、これまでドイツ語の文例が少なかったので、まとめて以下に挙げておく。ドイツ語の否定疑問文も、肯定の答えは **doch** を用いるという点は異なるが、基本的には英語と同様の考え方であるということを確認したい^{6), 7)}。

[1] **Ist es nicht amüsan?**

愉快ではありませんか。(肯定の確認)

[2] **Ist es nicht schön?**

素晴らしいではありませんか。(肯定の確認)

[3] **Habe ich das nicht schon gesagt?**

だから私が言ったじゃありませんか。(肯定の確認)

[4] **Ist es nicht Zeitverschwendung, sich überhaupt damit zu beschäftigen?**

そんなことに関わりあうなんて、時間の無駄じゃないですか。(肯定の確認)

[5] **Hat Gott uns nicht geboten, unsere Feinde zu lieben?**

神様は私たちに敵を愛せとお命じになったのではないか？(肯定の確認)

[6] **Ist es nicht besser auf ein Medikament zu verzichten, das gefährliche Nebenwirkungen hervorrufen kann?**

危険な副作用の可能性があることが分かっているならば、その薬は使用しない方がいいのではありませんか？(肯定の確認)

[7] **Haben Sie noch keine digitalen Kameras?**

まだデジカメ持ってないの？(意外性・驚き)

[8] **Gibt es in der Stadt keine Wasserversorgung?**

この町に水道がないのですか？(意外性・驚き)

[9] **Kann er kein Wort Japanisch?**

彼は一言も日本語ができないの？(意外性・驚き)

[10] **Kannst du nicht "nein" sagen?**

ちゃんとノーって言わなくちゃ。(非難・叱責・詰問)

[11] **Kannst du nicht endlich mal die Klappa halten?**

いいかげんに黙らんか！(非難・叱責・詰問)

[12] **Sollen Arbeitslose keine Kinder kriegen?**

失業者は子どもをつくるなというのか！(非難・叱責・詰問)

[13] **Bist du kein Fan der japanischen Nationalmannschaft?**

どうして君は日本チームを応援しないの？(非難・叱責・詰問)

注

1. 否定疑問文で肯定命題の確認をする、あるいは逆に肯定疑問文で否定命題を確認する働きをもつ日本語の疑問文のことを「反語疑問文」とい

う（「この問題難しくない？」→「この問題難しいね」／「奴がもてるって？」→「奴がもてるわけないだろう」）。英語やドイツ語の考え方では、これは「反語」（＝表現と真意が逆になっている）ではないので、そのような呼び方をすることはない（「修辞疑問文」という）。

2. 英語の否定疑問文は、話し手が肯定を強く予想するという背景から、しばしば「肯定の確認」や「意外性・驚き」や「非難・叱責・詰問」といった意味で用いられると言ったが、日本語の否定疑問文も、状況次第でそのような意味を帯びさせることは可能である。しかし英語と日本語の根本的な違いは、英語の否定疑問文がいわばその形式自体に上のような意味を内在させているのに対し、日本語では「意外性・驚き」や「非難・叱責・詰問」といった否定疑問文の意味合いは、その場の状況から生まれているということである。「宿題は終わっていないの？」という否定疑問文も、「宿題は終わったの？」という肯定疑問文も、いずれも場合によっては、「非難・叱責・詰問」として発せられることもあれば、「意外性・驚き」の表現として用いられることもあるが、これが「場面から生ずる意味」ということである。
3. 英語の **Won't you ~?** という表現は、文法形式的には日本語の「...していただけますか？」にぴたりと対応するので、意味も同じだと考えている人が多いと思うが、この両者にはかなりのニュアンスの差がある。英語やドイツ語の否定疑問文は肯定の付加疑問文として理解するとよい、という原則をここに当てはめてみると、**Won't you ~?** は **You will ~, won't you?** ということになる。するとこの表現は「...してくれるよね」と、親しみをこめつつ、相手からある行為を期待するというニュアンスであることが分かる。

日本語の「...していただけますか？」は、依頼やお願いの丁寧表現であるが、表現形式としてはそっくりでも、英語の **Won't you ~?** はこれとは使い方が違っている。**Won't you please come home?** は「帰ってきてくれませんか」ではなく、「きっと帰ってきてくれますよね」、**Won't you**

have a cup of coffee? は「コーヒーをお飲みになりませんか」ではなく、「コーヒーを飲まれますよね」である。

4. doch に関しては「Doch とはなんぞや？」という関口存男氏のすぐれた解説がある（「ドイツ語学講話」（三修社）所収、S. 201-206）。この中で関口氏は doch という副詞はその内に「肯定」（第1段階）「否定の動き」（第2段階）「肯定への逆戻り」（第3段階）という3段階の心の動きが含まれている、と述べている。これは否定疑問文を発する際の話し手の心の動きとそっくりである。
5. フランス語にもドイツ語の doch に相当する si という副詞がある。フランス語の yes は oui [ウイ] で、no は non [ノン] であるが、否定疑問文に対する肯定の答えには、si を使う。ただし、フランス語では提案や勧誘の意味で否定疑問文の形を用いることがよくあって、その場合には、実際の意図をくんで肯定の答えには oui を用いるのが普通である。
6. “Machst du da mit?” “Ja, warum nicht?” 「一緒にやる？」「うん、やるやる」などの Warum nicht?（英語の Why not?）が、どうして強い肯定を意味するのか、これで理解することができる。これもやはり否定疑問文の形式である：Warum nicht? = Warum mache ich da nicht mit? 「私が一緒にやらないなんてそんなバカな、なぜそんなことを聞くの？」
7. ドイツ語や英語では否定疑問文は「肯定の答えを予測」しているというのが本論文のポイントであるが、ではどうして「肯定の答えを予測」しながらの疑問文が否定疑問文という形式になるのであろうか。これには理由がなくてはならない。なぜなら疑問文も否定文もそれぞれその形式がもつ意味というものがあるからである。これはなかなかやっかいな問題であるが、私は否定文という形式そのものがもつ意味が日本語とドイツ語・英語では異なっているのではないかと推測している。

ここで詳しく説明できないが、先ず、ごく普通の状況（あるいは、普

通であると考えられる状況)において当然期待されるある事態は肯定文によって表現される(「この部屋は明るくない」ではなく、「この部屋は暗い」、あるいは「この部屋は暗くない」ではなく、「この部屋は明るい」)。つまり通常期待される事態は肯定文である。そしてその通常の手態ではない状態が生じた(と考える)時に始めて否定文が登場する。このように否定文というものの本質をとらえると、否定文というのはそもそも「あってはならない手態」を表現するための文法形式ということになる。ものごとの通常の手態を表現するのが肯定文であり、ものごとが通常から外れていることを表現するのが否定文である。

そうすると言語における「肯定」と「否定」は、数学や論理学でいうようなプラスとマイナスではない。「否定」は「肯定」の単なる反対概念ではない。「否定の否定は肯定」という論理学上の命題も、言語学においては間違いである。言語におけるあらゆる判断は価値判断という側面をもっているが、言語における「肯定」と「否定」もまた基本的に話し手の価値判断なのである。

参考文献

- 荒木・安井：「現代英文法辞典」 三省堂 1992
常木実：「標準ドイツ語」新訂版 郁文堂 1993
関口存男：「Doch とは何ぞや？」(「ドイツ語学講話」第一集所収 三修社 1975)
橋本文夫：「詳解ドイツ大文法」 三修社 1981
国松孝二他：「独和大辞典」第2版 小学館 2000
菊池・鐵野：「独和中辞典」 研究社 2003
富山・三浦・山口：「郁文堂和独辞典」第二版 郁文堂 1992
Duden. Grammatik der deutschen Gegenwartssprache (Duden Bd. 4),

- Dudenverlag, Mannheim 1984.
- K. E. Heidolph/w. Flämig/W. Motsch: Grundzätze einer deutschen Grammatik, Akademie-Verlag 1981
- U. Engel: Deutsche Grammatik, Julius Groos Verlag Heidelberg/Sansyusya Verlag Tokyo 1988
- Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache, Bibliographisches Institut Mannheim/Wien/Zürich (Dudenverlag) 1977
- R. Klappenbach/W. Steinitz: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache, Akademie-Verlag Berlin 1980
- G. Wahrig/H. Krämer/H. Zimmermann: Brockhaus-Wahrig Deutsches Wörterbuch, F. A. Brockhaus Wiesbaden/Deutsche Verlags-Anstalt Stuttgart 1980